

△書評▽

中村生雄著『日本の神と王権』

(法蔵館・一九九四年)

窪田高明

一

本書の著者中村生雄は、宗教学や日本思想史の領域において、昨今、もつとも活発に成果を発表している研究者の一人であり、本書『日本の神と王権』は、その最近の主要な論文を収録した論文集である。

本書は論文集ではあるが、その折々に関心を持った問題や外部から求められた主題に対して個別的に書いた論文を適当に収録したものなどではなく、一つの問題関心の下に、組み立てられた著作である。たしかに、論文相互の間の関連があまり明確でなかったり、一部の第三論文から第五論文にかけて内容上の重複が見られるなど、書き下ろされた著作にはない性格を持っている。また、中村自身が「まえがき」の中で「一貫した見通しのもとに全体が体系づけられているわけではない」と述べているとおり、本書に整理された「体系」を求めるのは酷であろう。しかし、中村がある程度計画的に収録された諸論文を書き継いだことは、「まえがき」の中で触れ

ている本書の成立の契機に関する部分からも窺えるのではない。それによれば、中村が本書の構想を意識したのは遅くとも第二部の第一論文「秘儀としての王権」を発表した時点である。そして、本書に収められた論文のほとんどは、この論文と同時期ないし、それ以降に書かれている。本書に収録された諸論文が、すべてが事前に計画されたものとはではないにしても、執筆の時点で全体のまとまりを意識して書かれたものと考えてもよいのではない。

では、その主題とはどのようなものか。それについて中村は、「まえがき」の冒頭で、ホカートの「多分どんな王も神なしでは、またどんな神も王なしでは、存在しなかったことであろう」という言葉を引き、「支配と服従という人類史をつらぬくへこちら側Vの關係は、その背後に神というへあちら側Vの力を前提にして成り立ってきた」と述べている。中村は、神と王権という問題を「人類史をつらぬく」として捉え、その問題に挑戦しようというのである。これは魅力的な問題だが、同時に、人間の文明の秘密を開ける鍵でもあるから、当然、おそろしく困難な問題である。中村がホカート

に呈している「八王権」の問題を正面からとりあげた」という評価は、そのまま中村自身に投げ返すことができるだろう。中村は人類史の秘密を正面から取り上げようというのである。では、中村はこの問題をどのような構想で捉えようとしたのか。ここでまず、本書の収録論文の題名と副題を見ておくことにしよう。

本書は、「まえがき」の後に、九論文を二部に分けて配置している。各論文の題名と副題は次のとおりである。

一部

一、日本の神の発生

古代のタマとカラ

二、崇り神と始祖神

神と祀りの発生と制度

三、神仏関係の中世の変容

八権／実／パラダイムの成立と反転

四、苦しむ神／苦しむ人

再生する崇り神

五、肉食と蛇身

中世神祇世界の相貌

二部

一、秘儀としての王権

柳田国男と大嘗祭

二、王権の儀礼と構造

大嘗祭における八中心／と八周縁／

三、狂気と好色をめぐる物語

花山上皇の西国巡礼創始譚

四、近代王権の変身過程

八童形／八女装／八男装／の三類型

題名と副題だけでは、わかりにくいかもしれないが、諸論文の中で主題は次のような順序で展開されている。まず、日本人にとつての神の原像を明らかにすることが必要である（第一論文）。その上で、主題はどのような神が具体的にどのような存在として出現したかと

いう問題に受け継がれる。そして、同時にそれは神を祀るといかなることかという問題でもある（第二論文）。さらに、そのような神の信仰がどのように変化したかという問題を、本地垂迹説における権と実という対立概念の転位という視点から考察し、苦しむ神という存在の意義を評価する。このような展開の背後に一貫して存在しているのは、神を考えることは、抽象的、神学的な思弁の水準で行われるべきことではなく、生命と感覚に根差して行われるべきである、とする立場である。

第二部では、王権の秘密が対象となり、特に大嘗祭という天皇の儀式の解明が問題となる。その中で、一つの中心的な主張として、大嘗祭の秘儀性という問題が打ち出されている（第一論文、第二論文）。また、天皇の特質を、その外部へ示す形態の特徴から「童形」「女装」「男装」と規定し、明治天皇の個体発生に、天皇の可能性の全貌を読み取るという試みが行われる（第四論文）。（花山院という特異な上皇を扱った第三論文はそれ自体は巡礼の祖としての天皇という興味深い問題を扱っているのだが、本書の他の論文との関連が私には明確に理解できなかった。）

こうしてみると、「神と王権」という問題が第一部では神とは何かという側から、第二部では王権とは何かという側から、取り扱われていることがはっきりする。本書の構成が、本書の題名、そしてホカートの言葉ときっちり対応していることは明白である。

では、このような構想の下で中村はどのように問題を解明したのか。本書の全体について、その内容を検討する余裕はないから、本稿では私自身の関心からもっとも興味深い論考であった第一部の第

一、第二論文について、私なりに内容を整理し、評価を述べ、その後でさらなる探求への要望を加えることにする。他の論文については、検討の中で関連する範囲で簡単に触れることになる。

二

第一部で、中村が取り上げる問題は、大きくいえば、日本人の神とは何かという問題なのである。このような大きな問題を取り扱うために中村がとる手順は次のようなものである。まず中村は、日本の神観念を考える上で参照すべき業績として、柳田と折口という二人の先学の主張を踏まえる。時には、両者が明示的に対比されているし、そうでない場合も論の背景としてその対比が踏まえられていると思われる。中村がこの二人を問いの出発においた理由ははっきりとは書かれていない。しかし、論文全体の展開から判断して、中村がこの二人の思想的営為を「日本の神の基本的性格」を掘り起こそうとしたことだと考えていると思われる。一方、この対極にあるものとして「神学的イデオロギー」や「単線的な発展段階説」が否定されるのは、これらが日本人の神観念の基底に立脚することなく、観念的な思弁によって神観念を組み立てるからである。

そして、中村は柳田と折口の学説を対比することで、より「日本の神の基本的性格」、「鋭敏で豊かな身体と生命にたいする感覚」に即した神理解を選択するが、同時に二人の学説の欠陥をも指摘し、その克服を目指すことになる。その克服の契機として呼び出されるが、それ以降の研究者の業績である。中村がもっとも中心的な部分で影響を受けているのは益田勝実であるが、ついで佐藤正英などの

考察が取り込まれている。

第一論文では、日本人の神の原像とは何かという問題が主題として取り上げられる。中村は柳田と折口の説を比較し、柳田の祖霊論を靈魂の歴史学と捉えるのに対し、折口の靈魂理解をその生理学と把握し、そこに神の原像の理解を見出そうとする。だが、中村は折口の論の価値を高く評価しつつも、折口の「靈魂の話」に代表される「タマ・カラ」の二項を立てる魂の理解を検討し、そのタマとカラの關係が「容器と中身」という「機能的」な關係として捉えられており、結局、タマ一元論になっていることに注目する。そして、そのような折口のタマ・カラ論が、「古代日本人のアルカイックな身体感覚」から離れてしまった点を指摘する。中村は折口のへたましいV論を生理学と特徴付けながら、他の部分では「古代日本人の生理に即した形而上学」と言い換えているが、その場合、折口の「タマからのカミとモノの分化」はもはや「神学的回答」に変化しているということになるだろう。

では、このようなタマ・カラ理解はどのように改められるべきなのか。中村はここで、益田の論を援用し、「み」という概念を挿入する。(論文の記述では、折口説の検討よりも益田の見解の紹介が先にくるが、思考の展開に即せば、こう書くことは許されるだろう。)この「み」とは、益田自身により、次のように規定されている。「タマがカラに宿っているあいだは、生命の通っているカラ全体をミ(身)という」

このようなミの概念を導入することにより、「ものいみ」は生命の回復という具体的な内実をもつことができる、と中村は考えて

いるようだ。そして、神の発生について考えるとき、「身体と生命にたいする感覚を抜きにしては、日本の神々の発生について何ひとつ語ることができない」と指摘する。このような姿勢は、第二論文でも「神が人間にとってリアルな対象としてあらわれる」場面を重視する展開に現われている。

もちろんこの部分では、批判は表面的には折口に向けられている。しかし、中村が意図しているのは、死せる折口その人の学説を否定することではないだろう。というのも、中村の議論は、まずは折口の論の回路を辿ること始まり、やがてその展開が自分の感覚から乖離し出す地点から、新たな思索を開始しているように見える。中村は、その乖離の生み出す違和を克服するため、自分にとって感覚的に納得できる神の発生を求めようとしているともいえるだろう。

中村の論文は、折口の論を批判し、益田の主張を高く評価しているように見えるが、それにもかかわらず、論の基本線としては折口の説を再生する方向へ進んでいる。そこから、折口の批判というよりは、折口との対話という印象が生まれる。中村が批判の対象として想定しているのは、折口の主張を神学として展開させてしまうような、観念的な神理解であろう。

三

第二論文の目的については、中村自身が「古代王権と祖神祭祀のかかりについて総括的な考察をこころみる」ことだと説明している。まず第一論文を受けて、そこで扱われた神の原像が具体的にどのような形をとって出現したかという問題が取り上げられ、祟りの

重要性が指摘される。そして、そのような神の祀りとは何かという問題が取り扱われる。これ以降の論文が、この第二論文の議論を踏まえ、神仏習合という問題のなかに、この祟り神の信仰の行方を探る進捗になっていることを考えると、この第二論文が本書においてもっとも重要なものであると考えられる。しかし、本論は多くの問題を含み込んでおり、その内容を簡潔に紹介することは難しく、ここでは私なりに理解し得た範囲で基本的な展開を示す。

まず、中村は、天照大神と倭大国魂を崇神天皇が二人の娘に祀らせたという内容を含む崇神紀五年の記述を取り上げ、特に倭大国魂がナガヲチに、大物主がオホタネコに祀らせることになったことの意味を考えようとする。そして、ここから神の祀りに二つの水準を区別する。一つは祟り神が八神の女 $\vee$ との性的交渉といった形をとる、憑依・託宣などを実体とする八発生としての祀り $\vee$ であり、一つは神の子孫であるとされる祀り手と祭祀の方式とが恒常化して継承されていくようになった場合の八制度としての祀り $\vee$ である。これが中村の第一の主張である。

ここで、中村の考察は日本の神の原型とは何かという問題に向かう。まず、祖先神か外来神かという選択がある。中村は、日本人の信仰の実情はその両者の複合である、という益田勝実の考えを参照する。中村は、結論としてはこの複合説を否定するのだが、単一モデルに還元しようとする発想は「古代人の暮らしの具体的イメージを見逃してきたのではないか」という益田の指摘を評価し、神が具体的な存在になる場合に重要な点が「たたり」という事象であることに注目し、祟り神こそが日本の神の原像であると主張する。そし

て、祟り神と守り神（祖神）の対立は、「じつは人間と神との交渉の進展の度合いに応じた変化にすぎない」「祀りの発生と制度化という時間軸上の先後関係に応じてあらわれる神の二つの顔にすぎない」と主張する。これが、第一の主張から発展した第二の主張であろう。

そこから、中村は柳田の玉依姫の考察を手掛かりとして、この問題をさらに展開させる。祟り神と祖神の祀りの相違が、その共同体における祭祀の力の在処の変化に対応するものと考えようというのである。そこで、父なる祟り神と母神、その御子の神の三対を神話水準の関係として捉え、それに対して祖神とそれを祀る祭主（ヒコ）と巫女（ヒメ）を祭祀の三対構造として対置する。そして、この祭祀の三対構造が、ヒコの力を強化し、ヒメの隷属を進行させるとする。また、この二つの三対構造を結び付けるものとして、巫女的女性の霊巫的な力を取り上げ、前者では神の妻という構造の中心であったものが、神の子を生む母神に転化し、巫女は首長を霊的に守護するという従属的な存在になってしまふという。これが、中村の第三の主張であるといえよう。

このような考察を踏まえ、中村は、崇神朝における神祇制度の整備の不完全性を指摘する垂仁紀の記述を解釈しようとする。中村は、その記述を「崇神王権の神祇政策を根本的に無効とする過激な見解」だと読み解こうとする。その根拠は、この部分が倭直とヤマト王権側が日の神の祭祀上の争いをし、王権側が宗教的には敗北した、ということを示していると解釈することにある。そして、書紀の以降の記述でこの問題が触れられることがないのは、倭直が政治的に敗

北したためであるとする。そして、そのような敗北の原因をヒメにたいするヒコの優位、宗教に対する政治の優位の成立に結び付けているのである。

四

以上の二論文について見ただけでも、中村が「まえがき」の言葉に偽りなく大きな問題に正面から取り組んだことがわかるだろう。中村は問題を細部から検討するというよりは、全体的な枠組みを視野に入れながら考察を進めるといふ、大きな構想の下に思索を展開しているのである。

もちろん、すべての点で中村の試みは完結したわけではない。思えば、それは神と王権といった主題が、一時期、盛んに論じられたにもかかわらず、表面的な華やぎ程、学問的な内実として成果を生まなかったのではないか、ということを反省させる。そのような状況の中で、中村の労作は根本的な問題への判断を回避することなく、研究の真の進展を目指したものでいえる。そこで、以下、私が本書の記述について書く疑問も、中村への批判を目的としたものではなく、今後、私自身が考えていきたい問題点ということになる。

まず、全体をとおして気になることが一つある。それは、中村が「身体と生命にたいする感覚」という語に見られるように、観念的な推論に頼ることを戒めているのに、その立論が神の信仰の具体的事象や事象に密着した資料に直接依拠して議論を展開するのではなく、すでに論理的に整理された議論を基礎にしているように見えることである。たとえば、第一部第一論文で、中村は柳田、折口の論

を、さらには益田の論を比較検討している。そして中村が判定を下す根拠は、宗教的な事象ではなく、彼らの概念を比較し、整理して導き出した論理的判断にあるように見える。このような印象は、具体的な資料に基づいて議論が展開されている第二論文でも生じてくる。ここでも、結論の基本的な枠組みは、折口や柳田を始めとする先学の図式の比較検討から生まれているように見えないわけではない。言い換えれば、先学の業績の間隙について、その背後の原像に迫ろうという方法を目指しながら、現象の収集や理解では、先学の知見の上に乗っており、そのため考察が先学の業績の対立を論理的に整合化する作業に陥っているようにも見えてしまうのである。これは、視野を広く設定し、基本的な概念の再検討を行うためには止むを得ない方法だったとも思えるが、中村が実感の重視を説くだけに、出発点と作業の間に齟齬があるように感じられる。事象への配慮を失うと、中村のいう「身体と生命にたいする感覚」が、現代人の感覚を古代人の感覚と同一視し、それを古代人の感覚として錯覚してしまふことになる危険性がある。

つぎに、神話と祭祀の三対構造の問題に移る。ここでも、中村の議論が神の信仰の実情ではなく、論の論から生まれた展開ではないかという不安がある。しかし、それだけでなく、中村の論述ではあまりに多くの問題がこの三対構造から直接説明されてはいないだろうか。三対構造の図式自体、「三対」という語が三つの対のことなのか三項の關係のことなのかといった、基礎的なことを含め、より詳細な説明を中村から聞きたいと思うのは私だけではないだろう。この三対構造の正当性と適応範囲は今後の検討を必要とするだろう。

う。

祟り神が神の原像であるという重要な主張は、たしかに一つの困難を解決するように思われる。しかし、それは同時に新たに答えねばならない多くの疑問を呼び起こす。たとえば、第一論文で解かれている靈魂観は祟り神とどういう関係にあるのか、祖神とならない祟り神とはどのようなものか、天皇家の祖神を成立させた祟り神をどう理解するか（これは、佐藤論文ではかなり中心に置かれている問題である）、などなど。そして、これらの問題を考えるに当たって無視できない根本的な事柄として、神の信仰が共同体に支えられるとともに共同体を支えるものだという事が、本書の中では正当には扱われていないように思われる、ということがある。

第二部に収められた論文は、それぞれに興味深い内容を持っているが、第一部に収められた論文と比較すると、全体に議論が表面的であるような印象が残る。たとえば、大嘗祭を扱った論文で、中村は、大嘗祭の意義をその内実ではなく、それが秘儀とされていること自体に注意を向けている。これ自体はたしかに一つの視点になりうるだろう。しかし、それだけが強調されると、大嘗祭の内実を問うことには意味がなく、王権の中心に秘密の儀式がありさえすればよいということになりかねない。そうならば、大嘗祭とは何かを説明するのではなく、大嘗祭という問題を消滅させてしまうことになつてしまふ。このような方向へ進む時、論は宗教の現象への実感から離れ、政治的な機能の場面で問題を扱うことになる。いかにヒロの論理が成立したとはいえ、それが単なる政治の論理と同一に扱われることが許されるなら、その時点で神と王権という問題設定その

ものが消滅してしまうはずである。

この問題は、中村が政治の問題を重視しているためではなく、むしろ政治をさしあたりいわゆる政治と呼ばれている領域として承認してしまっていることに起因しているのではないだろうか。たとえば、中村は、「八あちら側」が、現在のように「神」とは呼ばれず、「人権」だとか「環境」だとかいう口あたりのいい名称で呼ばれることがあるにしても」とか「その神のことを「国家の死滅！」と呼ぶことも多かった」と書いてしまう。このこと自体はそれなりの正当性があるにしても、それならそのような「神」の求める王権とは何かという議論がやってくるはずである。また、「国家の死滅！」（そう呼ばれることが多かったのだろうか、という疑問は別にして）という神を、中村は単なる政治的標語の水準で語っているのではあるうが、「国家の死滅」という問題と王権の問題をどう考えているのだろうか。非政治的な姿勢が生み出す言説は、結果としてきわめて政治的な言説になる。このような中村の政治的言説が、「口当たりのいい」もう一つの説明として受け止められる可能性は高い。

この問題は、見方を変えれば、第一部と第二部の関係はどういうものかということであり、ホカートの言葉に帰するなら、「神」と「王権」を結び付ける「と」はどのようなものかということである。

（神田外語大学教授）